

高校教科情報との接続とスマートデバイス時代を 意識した情報リテラシー教育

Information literacy Education in consideration of Informatics for high school students and Smart Devices

矢島 彰^{*1}

Akira YAJIMA^{*1}

^{*1}大阪国際大学グローバルビジネス学部

^{*1}Faculty of Global Business, Osaka International University

Email: yajima@oiu.ac.jp

あらまし：高校生を取り巻く環境が激しく変化している。教科情報が「情報の科学」「社会と情報」の 2 科目となったこと、大部分の高校生がスマートフォンなどのスマートデバイスを所持するようになっていくことなどが、大きな変化であろう。これらの変化に大学がどのように対応すべきか、高校教科情報から社会人のジェネリックスキルへの接続についての実践例を報告する。

キーワード：スマートデバイス、教科情報、情報リテラシー、ジェネリックスキル

1. はじめに

大学における情報リテラシー教育は常に変化を要求されている。学習指導要領の改訂など、高等学校までの教育内容の変化に対応するのみならず、ツールやデバイスの変化、社会人に要求されるジェネリックスキルの変化など、様々な変化に対応する必要がある。

高等学校までの教育内容の変化という点では、教科情報が「情報 A」「情報 B」「情報 C」の 3 科目から「社会と情報」「情報の科学」の 2 科目となった。

また、現在は誰でもインターネットに接続できるコンピュータ（スマートフォン）を持ち歩く時代であり、新たな情報リテラシーのカリキュラムの作成が必要である⁽¹⁾。

情報社会は日々変化している。数学の教科書であれば 10 年前のものを用いて学習しても何ら問題ないが、高等学校の教科情報がスタートした 2003 年の教科書は現在では使えない。学生が大学を卒業した後も情報社会は変化するのであるから、学生時代の情報社会に精通すること以上に、将来にわたって情報社会とつきあう姿勢を身につけることが重要である。ソフトウェアの変化、サービスの変化によって取り残されてしまう人材を育成する教育をしてはいけない。

変化へ対応するためには情報科学の基礎的な理解が必要である。情報社会のしくみを支える情報科学に関しては、その変化が緩やかであり、大学時に学習した情報科学の内容は大学卒業後も有効である。この意味で、情報科学の理解と情報化社会への適応は両輪であるから、社会人への出口となる大学において、この両輪のバランスを整える必要がある。

2. 共通教科情報への対応

教科情報の履修に関しては、1 科目が必修である点は変わらないが、多くの高等学校で生徒に履修さ

せていた「情報 A」がなくなった影響は大きい。「情報 A」「情報 B」「情報 C」が並列でありながら、内容としては最も基本的な「情報 A」と、より高度な内容も含む「情報 B」や「情報 C」の間にはレベルの差があった。2 科目への変更は、3 科目から「情報 A」をなくして、「情報 B」と「情報 C」の 2 科目を残して再編したような雰囲気がある。このため、教科書の内容を理解することができない生徒が増えることが予想される。大学としては、新たな 2 科目からの 1 科目を選択してきた新生が、これまで以上に情報に対して難しい印象を持っていることを予想しなければならないであろう。

そして多くの高等学校が「社会と情報」のみを開講し、「情報の科学」の履修者は少ないことも予想されている。もちろん両科目は背反した内容ではなく、「社会と情報」科目でも情報科学を扱っているので、「社会と情報」の学習内容を一通り身に付ければ、基本的な情報科学は身に付くはずである。ただ、理系的科目である「情報の科学」を避けて「社会と情報」の開講を学校で選択しているのであれば、情報科学をできるだけ避けた授業が展開されると考えられる。

3. デバイスの変化への対応

近年は、大部分の学生が入学時にスマートフォンを所持しており、インターネットの利用は、大学や自宅以外にも拡大している。この変化にも大学は対応しなければならなくなった。学生スマートフォンの扱いを含めた情報リテラシー科目の教育実践も報告されている⁽²⁾。学生にとってスマートフォンは大学入学前から自分が使いこなしているデバイスであるため、大学の授業で教育されるものではないという認識がある。しかしながら、学生のスマートフォン利用方法は、教員が期待する利用方法ではなく、教員と学生にはギャップが存在する。

3.1 スマートデバイスでの教育

新しいデバイスの登場は、常にそれを用いた教育を産み出す。ICT を活用した教育の延長に、スマートデバイスを利用した教育は存在している。しかし、基本的な枠組みは古くから存在する CAI と大きく変化しているとはいえない。

スマートデバイスの場合、学習者は操作に習熟している場合が多く、スマートデバイスを活用した教育を推進する際の障害は教員側にあることもしばしばである。

3.2 スマートデバイスの教育

新しいデバイスの登場により、デバイスそのものや、そのデバイスで用いるツールの操作教育も必要となる。

LMS が普及しはじめた頃、学生に、インターネットに接続された PC から LMS を利用させる場合には、事前に何らかのガイダンスが必要であった。OS によるファイルの操作、リムーバブルメディアの扱い、LMS の利用方法などである。

スマートデバイスを利用については、前述の通り、学生は慣れており、新しいツールに対しても戸惑うことなく利用できる学生がほとんどである。

一方で、SNS 等を利用する学生に対する情報モラル教育の重要性が増してきている。これらの情報モラル教育をスマートデバイスの教育として扱うことも可能である。

3.3 スマートデバイス利用のねらい

スマートデバイスの利用を情報リテラシーとして扱うことのねらいは、デバイスを様々な場面で有効に活用しようとする態度を育成することであるといえる。学生は、日常生活において、スマートデバイスを積極的に用いているが、娯楽や友人との繋がりのための利用に終始している。他の使い方を学生に示し、体験させることで、デバイスを有効活用する態度を育成しなければならない。学生が社会人となったときに、新たなデバイスやツールに対して、業務での有効な活用に積極的となる態度の育成が大学に求められているはずである。

4. 情報リテラシーカリキュラム例

大阪国際大学では、2014 年度にビジネス学部と現代社会学部をグローバルビジネス学部へ改組するにあたり、従来の「IT の基礎理解」科目群を「ICT の活用」科目群として再編成した。大学生に求められる情報リテラシーの変化に対応する必要があったためである。大きな変更点は、2 単位必修科目「コンピュータ基礎演習」を設定したことである。座学科目は「情報の科学」「情報の社会」の 2 科目であり、高等学校教科情報との繋がりが分かりやすい名称とした。同科目群の実習科目は Excel が 2 科目、データベース 1 科目、マルチメディア 1 科目となった。科目群計 10 単位中 6 単位以上の取得が卒業要件である。この 6 単位には必修科目 2 単位分が含まれてい

る。表 1 に必修科目のカリキュラムを示す。

表 1 コンピュータ基礎演習カリキュラム

回	内容
1	OIU メール・moodle
2	moodle・iBook・Adobe Reader
3	情報モラル (1):座学授業
4	情報モラル (2):座学授業
5-6	Word の基礎
7	Google ドライブ
8-9	Word の文書作成と文字書式・段落書式
10	スマートデバイスアプリ (1):iMovie, iPhoto, CamScanner
11	Excel の概要
12	スマートデバイスアプリ (2):Evernote, OneDrive, DropBox
13-15	Excel:数式作成・書式・参照方法
16	スマートデバイスアプリ (3):各種学習アプリ
17	Word:表作成とビジネス文書
20	スマートデバイスアプリ (4):ニュース・教養・記録・ファイル作成アプリ
21-22	Excel:基本的な関数・グラフ
23-25	Word:図形描画・レポート作成
26-29	PowerPoint
30	総合演習:レポート作成とプレゼンテーション

5. おわりに

学生の環境や学習履歴の変化に伴い、情報リテラシー教育の内容も変化する。情報モラルやデバイスやツールを適切に活用しようとする態度は、このような変化があったとしても求められる能力であり、情報リテラシーカリキュラムを検討する際には重視しなければならないであろう。

参考文献

- (1) 矢島彰, 田窪美葉, 石川高行, 安達康生: “教科情報のリメディアル教育としての大学情報基礎教育”, 第 38 回教育システム情報学会全国大会講演論文集, pp.189-190 (2013)
- (2) 榎井猛, 梶木克則, 那須靖弘, 吉川博史: “モバイル端末を用いた演習について”, 第 38 回教育システム情報学会全国大会講演論文集, pp.423-424 (2013)